

越境地域政策研究フォーラム

地域間交流研究シンポジウム「越境地域から広域ブロックへ」

- パネリスト【三遠南信】戸田敏行氏（愛知大学三遠南信地域連携研究センター長）
【木曾地域】山田雅雄氏（名古屋市立大学経済学部特任教授（元名古屋市副市長））
【上越地域】内海巖氏（上越市創造行政研究所主任研究員）
【九州地域】飯干辰己氏（前宮崎県五ヶ瀬町長）

コーディネーター 岩崎正弥氏（愛知大学地域政策学部教授）

コメンテーター 福島茂氏（名城大学副学長・都市情報学部教授）

日 時：2015年1月31日（土）

場 所：愛知大学豊橋校舎

○岩崎：皆さま方、既にご案内だと思いますが、越境地域政策とは、まずは県境の壁を取り除くことで、何が可能になるのかということから構想を始めております。例えば、資源の有効活用、リスクの共同管理などが考えられます。そのうえで、今回は広域ブロック形成、あるいは広域ブロック政策までを射程に入れた議論をしてみたいと考えました。

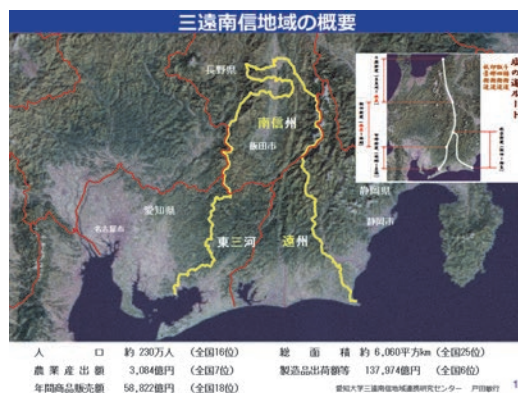
おそらく、越境地域政策を有効に機能させるためには、広域ブロックをいかに活用するのが大切になると思われます。逆に広域ブロックの形成を考える上でも、この越境地域をいかに活用するのが重要になると思うわけです。そこで本シンポジウムでは、そのための素材を、パネリスト・コメンテーターの方々と共に考えてみたいということです。

本日は、各越境地域からお越しいただいた4名のパネリストに加えまして、コメンテーターも含め合計5名の方に議論に加わっていただく予定です。全体で75分という非常に短い時間で限りがございますが、お一方3回のご発言はしていただければと考えております。

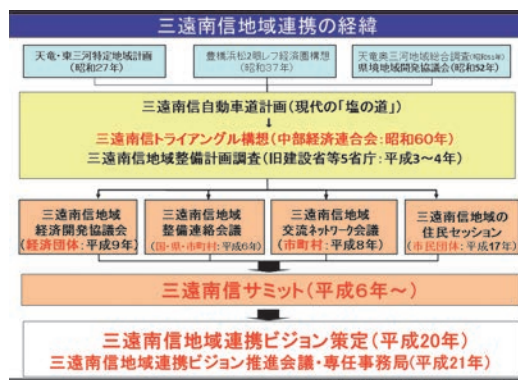
それでは、早速ですが、まずはそれぞれ自己紹介を兼ねながら、各越境地域での取り組みをお話いただければと思います。まずは三遠南信地域の取り組みとして、戸田先生よりご説明をお願いいたします。

○戸田：三遠南信については、皆さんご承知のところが多いと思いますが、振り返りも含めて取り組みをご紹介します。特に、広域ブロックと越境ということでご紹介したいと思います。

三遠南信地域ですが、規模的に人口230万人ですから、一県に相当するような規模のエリアになります。なぜこのかたちかということ、ここに豊川、天竜川という大きな流域圏を持っているということです。



<三遠南信地域の概要>



<三遠南信地域連携の経緯>

これは三遠南信地域の連携の経緯ですが、越境する要素が時系列で並んでおります。天竜・東三河特定地域という日本の戦後の国土計画ですが、これは流域で、歴史的つながりをいっております。それから三遠南信自動車道という県境を越えての人の動きができるという、この人の動きが2つ目のポイントです。

3つ目の「三遠南信トライアングル構想」ですが、これは中部経済連合会という広域経済団体が提案者になります。越境地域を捉えるときに、このような広域的なブロックからのプランニングがあります。越境性と広域性は、連動するものであることを示しております。

4つ目が地域のなかで境界を越えた、様々な主体の連合体になります。ここに「三遠南信サミット」とありますが、その合同の場が形成されます。これが越境した地域のつくり方として生まれることだと思います。

5つ目がビジョンです。越境地域が計画を持つことになります。最後に、こちらは略して「SENA」と言いますが、「三遠南信地域連携ビジョン推進会議」という組織で、ガバナンス形成の領域になります。このような6点の特徴を持っています。

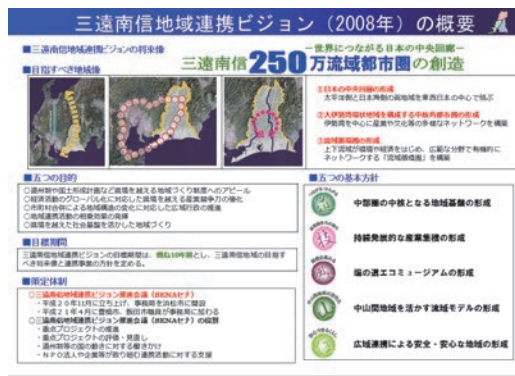
内容を簡単にご説明しますと、「合同の場」という三遠南信サミットです。これは今年のサミットです。全基礎自治体の首長、経済団体の長、途中からですが、住民団体の方、地域に関わる各主体が一堂に会するところがポイントです。必ずしも議決の機能を持っているわけではありませんが、全ての関係者が入っていますから、ここで物事が決められていくという構造を持っております。



＜行政・経済・市民のサミットの構成＞

「三遠南信地域連携ビジョン」の概要ですが、地域像があります。三遠南信地域内だけではなく、外に

対してどうだという議論をおこなうということです。中部圏の中で、名古屋圏とは違った圏域を主張しています。



＜三遠南信地域連携ビジョンの概要＞



＜三遠南信地域の目指すべき地域像1＞



＜三遠南信地域の目指すべき地域像2＞

今日は、上越から内海さんが来られていますが、日本の中央回廊としては、日本海までの広がりを持つことを意図しています。

三遠南信 (8信金) しんきんサミット

三遠南信 (8信金) しんきんサミット

第1期 日時:平成27年11月6日(日) 場所:ブルスタワー1階 三遠南信(シンポジウム) オプション:ホテル、ブッフェット(三遠南信、人形町産農) 内容:三遠南信シンポジウム 三遠南信、人形町産農(5会場、計154ブース)

第2期 日時:平成28年10月6日(日) 場所:新田産農センター 三遠南信、人形町産農、物産展の自発) 会場:三遠南信、人形町産農、物産展の自発) 会場:三遠南信、人形町産農、物産展の自発)

第3期 日時:平成29年11月6日(日) 場所:新田産農センター 三遠南信、人形町産農、物産展の自発) 会場:三遠南信、人形町産農、物産展の自発) 会場:三遠南信、人形町産農、物産展の自発)

構成する信金	三遠南信	予金量(百万円)	職員数(人)	店舗数(店)
三遠南信	1,452,926	1,000	57	
三遠南信	638,949	509	33	
三遠南信	365,421	340	25	
三遠南信	403,321	390	25	
三遠南信	748,205	554	32	
三遠南信	673,754	594	38	
三遠南信	1,060,089	835	50	
三遠南信	478,600	319	24	
合計	5,820,601	4,604	284	

三遠南信(8信金) しんきんサミット事務局各信金信用金庫事務局

愛知大学三遠南信地域連携研究センター 戸田敏行

<三遠南信しんきんサミット>

松谷先生のお話にもありましたが、圏域での経済の循環を考え、中小企業の連携をどうつくるかというときに、信用金庫には企業をつなぐという役割があるのではないかとということで、地場の八つの信用金庫サミットができています。これはかなりのボリュームです。預金量でも6兆円ぐらいあり、この範囲で産業、経済の循環を考えることが重要です。

三遠南信地域連携ビジョン推進会議 (SENA)



<SENA>

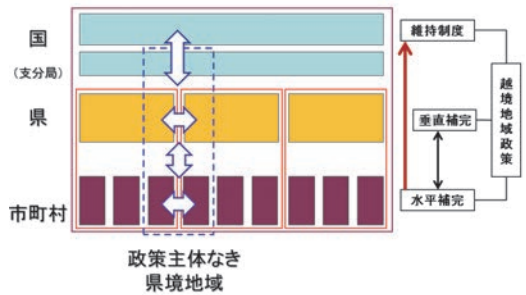
これがSENAの仕組みです。現在はもう少し単純化していますが、市町村もあれば、経済団体もあります。先ほどの金融もあれば、シンクタンク、あるいは大学といった地域の主体が越境する連携を考えています。

最後に、これからの展望として、「平成28年度を目途とした広域連合」とあります。これは組織、ガバナンスになってくるかと思いますが、これをどうするかは課題です。

越境地域政策には3段階の連動があると考えております。3層制は日本の行政のかたちです。国があって、県があって、市町村があります。ここに支分局という例えば、整備局や経産局、これも県単位でだいた

いは分かれております。

越境地域政策の3段階連動

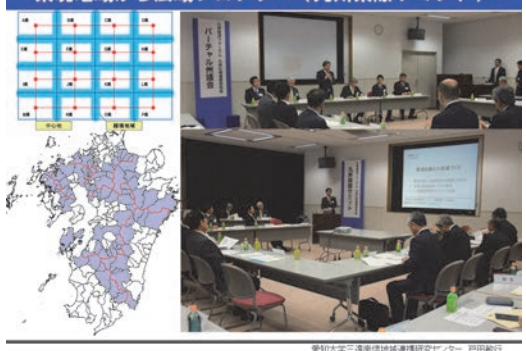


<越境地域の3段階連動>

「水平補完」「垂直補完」「維持制度」と記載していますが、この三つを合わせて越境地域の政策と考えられるのではないかと思います。

「水平補完」は、越境した基礎自治体相互が支え合う、ありていに言えば、市町村間連携ということになります。県境を越えた市町村間です。それから、「垂直補完」があります。県のレベルから補完していくことです。ただ、県を越えますから当然、県相互の横のつながりも出てきます。これを敷衍(ふえん)すると、道州というようなかたちになってくると思います。

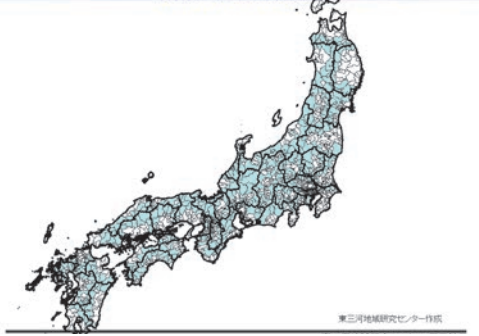
県境地域から広域ブロックへ(九州県際サミット)



<県境地域から広域ブロックへ>

もう一つは、制度設計の問題です。越境エリアは、だいたい不利益地域が多く、必要に応じて制度を変える、特区的に扱うという問題が出てきます。この三つが連動して動いていきます。広域ブロックと越境地域については、あとで飯干さんからお話があるかと思います。九州では、広域ブロックに関して県境の市町村だけが集まるタイプの試みがあります。

県境自治体の分布



＜県境自治体の分布＞

全国では、越境すべき県境に接する基礎自治体が、全国自治体の4割ぐらいです。ですから、この可能性が高いということです。私からは以上です。

○岩崎：ありがとうございます。続きまして木曾地域の取り組みとして、山田先生よろしくお願ひいたします。

○山田：ただいまご紹介にあずかりました山田です。名古屋市立大学の特任教授（元名古屋副市長）となっていますが、4年前に名古屋副市長を辞めましたが、実はその前に上下水道局長をやっておりました。

今日のテーブルの上に「愛知大学の水」が置いてありました。これは中部地方の洞戸でつくっている水です。実は名古屋の水も、愛知大学が委託している洞戸にある奥長良川名水株式会社に委託しておりましたので、非常に懐かしい思いがあります。

なごやの水道



＜なごやの水道＞

名古屋の水道は、木曾川・長良川・揖斐川の三川に水源を求めております。県では長野県と岐阜県、利用

者としては愛知県の尾張地区、三重県の北西部も木曾三川に依存しております。使った水をきれいにして流す先は伊勢湾です。水に関しては、県を跨ぐという越境について特に意識したことはありませんでした。今日、このシンポジウムに出席し考えてみると、越境なのかと思っているところです。

木曾の山々の豊かな水を、名古屋の水として使わせていただいております、上流の水源地の方に感謝の意を込めていろいろなイベントをおこないました。

例えば、幼稚園の子どもさん方に、木曾川にアユの稚魚を放流してもらう活動、市民の皆さんを木祖村にお連れして、上流の方と交流しました。市民の皆さんやボランティアが植樹作業をしたり、これは後で申し上げますが、上流の物産を水道の池の上で売るといったイベントをやりました。

上流への感謝を形に…上下流交流



愛知大学三遠南信地域連携研究センター「上流への感謝を形に…上下流交流」シンポジウム資料【木曾地域】山田雅道

＜上流への感謝を形に…上下流交流＞

また、職員とともに木曾川上流から河口までを歩きました。河川としては二百数十キロメートルです。歩く距離としては約300キロメートルありました。最初は、感謝の気持ちで交流をおこなっていたのですが、実際に上流の水源地へ行ってみますと、交流の場がなかったり、高齢者が多いなど、いわゆる限界集落に対する危惧を感じながら一生懸命にやっていたらっしゃいましたので、これは単なる交流ではいけないと思いました。

はっきり言いますと、上流の方々が疲弊すれば、そのぶん山も疲弊するわけですから、水質も水量も共に心配になるという思いがありました。伊勢湾から木曾の山々の水循環も大事ですが、これを確保するためには経済の循環、つまりお金を循環させないといけないだろうと思いました。

先ほどの「お金を地域で回せ」ということと同じ発

想ですが、とにかく上流のものを、下流側の名古屋市民などに良さを知ってもらおうということで、水道施設のオープンスペースにエコ市を立てて、食べものや特産物を持ってきていただいて、少しでも循環に寄与できないかという取り組みをしました。これは今も継続しています。

上下流交流から流域連携へ



水源林保全体験での間伐作業



鳴海配水場のエコ市
水の循環＝経済(お金)の循環

<上下流交流から流域連携へ>

それから間伐についてです。名古屋市上下水道局の職員は二千数百人おりますが、最初は昇任した管理職に「山へ行って木を切ってくい」と言ったところで、組合から「普通の職員も参加させてくれ」ということで、研修と言ってもいいかもしれませんが、木祖村の山へ入って間伐作業をやっています。これは結構大変で、ハチに刺されないための網のネット付きのヘルメットや長靴も確保しながら実施してきました。

現在は中部圏社会経済研究所で、この間の調査をまとめるとともに、実践が大事だろうと思い、木曾の木材などを活用したビジネスを起す人々を支援する活動をしております。以上です。

○岩崎：具体的な実践までを含めて、ありがとうございました。それでは、今度は内海先生より上越地域の取り組みのご説明をお願いいたします。

○内海：新潟県の上越市から参りました内海と申します。私が所属する部署は上越市創造行政研究所という名前ですが、2000年に市役所内に設置された自治体のシンクタンクです。そうは言いましても研究スタッフは3名から4名、全て市の職員です。そのなかで市政の抱える重要課題の解決や政策形成能力を高めるための調査研究活動を中心におこなっております。

上越市創造行政研究所の概要

平成12年4月 上越市役所内に設置された自治体シンクタンク

目的 調査研究活動等を通じて、市政の抱える重要課題の解決や政策形成能力の向上を目指す

対象分野 まちづくり全般
(行財政、産業、環境、交通、都市整備など)

業務内容 調査研究事業のほか、研究成果の反映・活用に向けた事業支援、研究交流、情報発信なども実施

位置付け 設置当初は市長直属
平成14年度からは企画政策部内

研究体制 所長(元大学教授・非常勤特別職)
次長(市職員・課長～副課長級)
研究スタッフ 3～4名(すべて市職員)
非常勤職員 1～2名
※ この他、テーマによって、議員・市民・有識者等と共同研究を実施



<上越市創造行政研究所の概要>

広域連携を考えるシンポジウムの開催

お祭り好きのまちもついに一歩新しい未来が真実になる!

地域づくりと広域連携を考えるシンポジウム

— 信越圏広域地域の連携事例に学ぶ —

開催日時 2月22日(日) 13:30～17:10

会場 上越市創造行政研究所(上越市役所内)

講師紹介

- 戸田 敏行 氏 (新潟県長岡市) 新潟県長岡市市長
- 本村 宏 氏 (新潟県新潟市) 新潟県新潟市市長
- 井口 智裕 氏 (新潟県新潟市) 新潟県新潟市市長

申し込み・問い合わせ先 上越市創造行政研究所 企画課 025-226-5184

<広域連携を考えるシンポジウムの開催>

広域連携につきましては、私どもは新参者です。今年度、愛知大学の地域間交流研究に採択いただきました。2015年2月22日に、初めてシンポジウムを開催することになっております。戸田先生にも来ていただきますし、あとは長野県飯山市の木村宏さん、新潟県湯沢町の井口智裕さんに来ていただく予定です。これからスタートラインに立つという状況です。

上越市がどのような町かを簡単に紹介させていただきたいと思います。人口は約20万人、14市町村が合併しましたので、面積が約1,000平方キロメートルという巨大な町になりました。

上越市を象徴する風景を四季で見ますと、日本三大夜桜といわれる高田城の桜、日本海、秋は新潟コシヒカリの実り、冬は何ととっても豪雪地帯ですので、山間地では多いところで5メートルになるところもあります。人の住む集落の日本最高記録として、8.18メートルという記録もあります。それから、日本スキー発祥の地でもあります。

上越市の概要

位置：東経138度 北緯37度
日本海側のほぼ中心、新潟県の南西部

人口：203,899人(平成22年国勢調査)

面積：973 km²



歴史：昭和46年4月、直江津港後背の臨海工業都市として発展した直江津市と、上越地方の経済の中心で文教都市として発展した城下町・高田市が対等合併して誕生。
平成17年1月1日、近隣13町村と合併し新生上越市がスタート。

<上越市の概要>

歴史的には、古くは越後の国府があった町です。直江津という港町があり、昔は北前船等で栄えていました。それから、戦国時代は上杉謙信の居城でした。江戸時代になりますと、徳川家康の六男、松平忠輝の居城として高田城ができ、城下町として栄えた町です。



<上越市の四季>



<上越市の歴史>

上越の位置は、豊橋市から長野方面へ北上しますと、日本海側に上越がございます。ちなみに、「塩の道」

で有名なのは松本から糸魚川に抜ける道ですが、上杉謙信が上越におりましたので、こちらにも「塩の道」がありました。

時間距離的には、越後湯沢に出まして、新幹線で東京に出て豊橋市へ来ると、ちょうど4時間という距離にあります。



<交通ネットワーク(現在)>



<交通ネットワーク(将来)>

それがこの3月に北陸新幹線が開業になります。松谷先生のお話では、北陸新幹線が来ると、ちょっと厳しいというお話でしたが、あと1カ月半で来てしまいますので、何とか前向きに捉えたいと思っています。

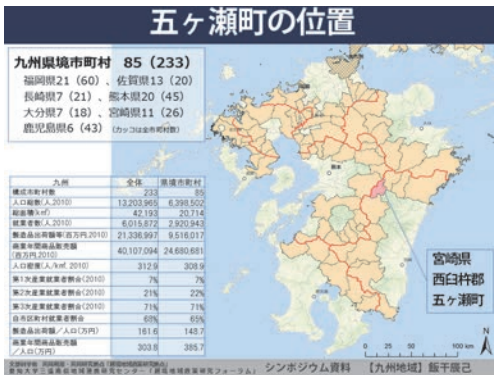
新幹線で長野までは20分、金沢までは1時間という距離になります。名古屋までは、長野から乗り継げば4時間かからないという距離になります。

長野までが中部圏とすると、上越は圏域としては中部圏ではありませんが、この県境から40キロメートル程度しか離れておりませんので、実質、中部圏と思っ

て今日はお邪魔をいたしました。以上です。

○岩崎：ありがとうございました。交通に関しては、また詳しくお聞きしたいと思います。それでは、最後に五ヶ瀬町の県境としての状況、そして九州の県際フォーラムの経緯等々について、飯干先生、よろしくお願ひいたします。

○飯干：ご紹介いただきました九州の宮崎から参りました飯干です。おそらく九州から私だけが来ているのだろうと思います。



＜五ヶ瀬町の位置＞

昨年5月まで3期12年間、ちょうど九州の真ん中になりますが、熊本県境に接する五ヶ瀬町という小さな町の町長をやっておりました。辞めて8カ月ぐらになります。

五ヶ瀬町の県境としての状況

- 九州のまんなか。宮崎の北西部。熊本県と接する。
- 平均標高620m。
- 夏場涼涼、冬場は寒さ厳しい。
- 人口4,300人
面積171.77Km²

＜五ヶ瀬町の県境としての状況＞

宮崎というと暖かいイメージがあるかと思いますが、五ヶ瀬町の平均標高が620メートルということですが、内海さんからスキー場の話がありました

が、五ヶ瀬町も日本最南端にあるスキー場があり、今シーズン真っ盛りです。ただ、お客様の6割以上は、熊本県の皆さま方がお見えになっています。通常から経済・文化の交流も含めて、そこに住む人たちにとっては県境という境は、まったく感じていないと思います。ただ、行政というわれわれだけが、勝手に熊本県という県境をひいているという状況です。そこが一番、この越境地域政策の一つのポイントなのだろうと思います。現場でやってきた者からすると、そこが課題だと感じているところです。

先ほどの松谷先生の話をお聞きして、「これだけはやってはいけないよ」という政策を、私は一つもやりませんでしたので、それはよかったのかなど。もちろん、合併もいたしませんでした。合併議論のときに町長に手を挙げましたが、反対していたわけではなく、そこに住む地域住民が幸せになる、幸福度が高まるという選択肢のなかに、その時点では合併という選択肢はなかったということです。大いに議論したなかで見いだした結論でした。

今もそれは正しかったと思っています。しかし、それで地域の住民が幸せになっているのかというと、決して幸せ度が向上しているわけではないと思います。

そこで、福岡県の経済界の皆さん方が中心となった経済フォーラムがあります。そこで「九州県際サミット」は、道州制を研究するために立ち上げられ、株式会社九電工の橋田社長（現在：相談役）が会長で、第1回は福岡市でおこなわれました。なぜか町村代表として指名がありましたので参加しました。そのとき戸田先生が、基調講演をされました。

第2回目をどこで実施するかというときに、経済サイドから、県際だから自治体でやってほしいという話がありました。しかし、そのときネックになるのは、研究会が道州制のために立ち上げられたということです。市長会や知事会は別ですが、町村会は道州制に基本的に反対しています。ですから、「では、五ヶ瀬町でやります」と、「どこかやりませんか」と言っても誰も手を挙げません。合併もそうでしたが、直接、現場で首長として一番感じたことは、決して合併が間違っていたということではなく、正しい選択でもあったと思います。

ただ、それが決して大成功とはなっていない要因は、やはり議論不足というか、立ち上がりが遅すぎて、逆に追い込まれて、走る列車に「飛び乗りますか？ 飛び乗りませんか？」という選択を迫られ、決断せざる

を得なかった部分もあって、今日を迎えているのだらうと思います。

町村会が道州制に反対したところで、人が減っているでしょう、合併はしなかったけれども幸せ度は増えていますか、ということからすれば選択肢の一つとして、道州制も踏まえて地方分権・自治体が自立してやれることは何かを議論しなければ駄目なのではないかと考え、あえて五ヶ瀬町で開催しました。宮崎県の町村長に呼びかけなければ、誰も来ませんので、あえて五ヶ瀬町で開催し、私の呼びかけに基づいて多くの町村長は訳がわからずに集まっておりました。

九州県際サミット開催経緯

- 平成24年8月21日・22日
第2回サミット五ヶ瀬で開催
- テーマ：分権型社会実現に向けて
- 道州制研究のため立ち上がったサミット
(主催：九州経済フォーラム)
- 町村会は道州制反対⇔あえて五ヶ瀬で開催し
議論喚起
- 選択肢は多様。
現行制度の中でもっとやれることはある。

宮崎県庁 企画課、宮崎県議会 宮崎県地域振興部 宮崎県地域振興センター「宮崎県地域振興フォーラム」シンポジウム資料 【九州地域】飯干辰己

<九州県際サミット開催経緯>

今年の九州県際サミットは、来週、佐賀県の嬉野でおこないます。戸田先生が行かれるようですが、聞いたところ、首長は3人くらいしか来ないのでは話にならないと思っています。今日でも松谷先生の話が誰が聞かなければいけないのか、先生方もそうですが市町村長がここに来て聞くと、これから先の地方創生の見方や感覚はすぐできるのです。やらなければいけないことはできると思っています。

やはり、選択肢は多様だということです。道州制もよからう、広域ブロックもよからうということで、今の制度のなかでやれることはたくさんあります。県境を越えてバスを走らせることも可能で、五ヶ瀬町でもすぐ隣の病院へコミュニティバスを走らせています。ただ、できなかったのは無料にしていないということです。どんなに乗っても200円です。もっとやれることはあるのに、われわれはやりきれていないのです。これが大事だと思っています。私からは以上です。

○岩崎：ありがとうございました。それでは、一通り

ご説明いただきましたので、今日はコメンテーターとしてお集りの福島先生からコメントをいただきたいと思っています。お願いします。

○福島：名城大学から参りました福島です。都市計画・地域計画を専門にしております。今日は「県境地域から広域ブロックを考える」というテーマになっています。パネリストの先生方のご発表について簡単にコメントしたいと思います。

戸田先生には越境地域関係を考える枠組みをきれいに提示していただきました。越境を考えるとき、国・県・市町村3段階の階層性があること、そして垂直と水平という二つの越境関係があるということです。この二つの軸をどのように連動させるべきかを考えることは、望まれる広域圏づくりの視座ともなります。この意味において三遠南信には非常に厚みのある取り組みがあることがわかりました。地域の福祉や生活の質を高めていく上でどのような越境関係を構築すべきか、経験に学ぶ非常にいい素材ではないかと思っています。

山田先生のお話は、越境地域の抱える非常に重要なファクターとして、資源管理や自然環境の管理があるという点です。こうした政策課題は一つの自治体あるいは一つの県のなかでは収まりきれない部分があります。相互依存の関係にあることを認識したうえで、協力するアプローチの大切さが理解できました。「流域圏」という考え方は、越境地域の政策協定、あるいはガバナンスを考える上で非常に重要な求心力になります。

松谷先生の基調講演のなかで、新幹線・リニア・高速道路などが整備されると逆に東京等に吸収されてしまうという話がありました。内海先生がご報告された上越地域は北陸新幹線の開通によって新しい経済機会が生まれます。どのような地域単位で域内循環や地域アイデンティティの確立を考えていくのが議論されはじめており、そのなかで越境関係の構築が模索されていることが示されました。

飯干先生のお話は、戸田先生が示された越境関係の枠組みで言うと「市町村レベルの水平間の連携」に焦点が当てられています。合併や道州制を考える前に、何をすることが地域の自立、地域の生活の質の向上につながるのかをまず各市町村のレベルで考え、また、市町村の連携を通してその可能性を模索していることが印象に残りました。

○岩崎：どうもありがとうございました。一通り各越

境地域の取り組みをご説明いただきました。続きまして、越境地域から広域ブロックに対する期待と課題についての話をいただければと思います。今度は飯干先生からお願いをしたいと思います。

○飯干：それでは、五ヶ瀬町の九州県際サミットがどうであったかを申し上げます。県内からは20市町村長くらい集まっていただきました。県外の市町村からも来ていただき大変盛況でした。私が議長で「分権型社会実現に向けて」というテーマで、これは五ヶ瀬町第5次総合計画の重点戦略の一つにしていたものです。これであれば集まりやすかろうと、いろいろな議論をさせていただきました。

いわゆる県境を越えて現実にやっていることがありますので、教育・医療・観光も含めて連携の必要性は、皆さん認識していましたし、あらためて集まって認識したということです。もとより意見をまとめるのではなく、課題を洗い出して、今後、どのように議論を展開させていくのかを、一番の主眼として開催したので、そこはよかったかと思えます。

問題は、具体的にどのように動き出すのか、アクションを起こすのかです。大勢が集まって「いろいろな課題がありますね」、「そうですね」とはなりましたが、それぞれの地域に帰った首長が考え、連携を取りながら政策として展開しているかという、まだまだだと思っています。

当然、いくつかの自治体が県内にもありますし、県境を越えた隣町、隣の県にもあります。そうすると、首長、トップリーダーの感性、考え方によるところが、どうしてもネックになります。その意識を共有させるのに、残念ながら時間と労力がかかり、実際に動き出すのに時間ばかりかかって、結果として動きだせないことが、われわれの地域の課題だと思っています。

要は、もうやるしかないのです。具体的に地域で実践してみせることしかないと思っています。その意味で、この三遠南信のいいところは、首長サミット等で、あれだけの首長が全員そろっているということです。それをしっかり守りながらやるのが首長サイドというか、経験者からした非常に大切なところだと思います。

いざ市町村が県を越えてやろうとするときに、ある意味でネックになるのは、県のレベルです。われわれの気持ちは一つになりつつあるのに、「いや、それは熊本県さんがやられるでしょう?」、「うちは宮崎県ですよ」とになります。そこで、プライベートで休みの日に、五ヶ瀬町に宮崎県の職員を集めて、県境政策を議論し

た経緯もあります。その彼らが、今度の4月からは各部長になって、宮崎県の政策展開をやってくれると思います。そのときに、よりフレキシブルに五ヶ瀬で議論したようなことを、彼らが県政でやってくれるのか。そこでの意識共有も非常に、越境政策、地域政策を展開する上で一つのポイントになると思います。

私に言わせると、そういうところにつまらない手間暇がかかりすぎて、本質のところになかなか踏み込むことができないのが課題で、やっていることは、たくさん細かいことですが、それをもう少しロジカルにして組み立ててやればいいのかと思います。

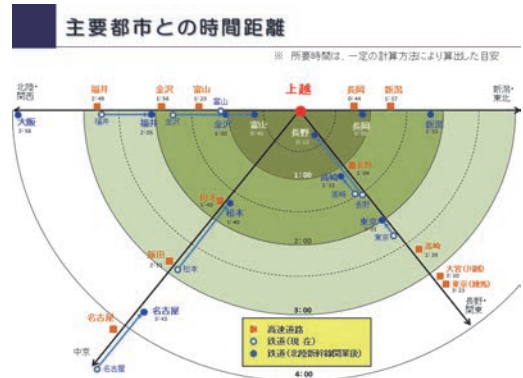
今回、そこも勉強したいという思いで参加させていただきました。首長をしていないほうが、周りからやれることがたくさんあります。そういった状況で、五ヶ瀬の「九州県際サミット」は終わったという状況です。私からは以上です。

○岩崎：県や市長会、あるいは町村会等々で、立場が異なるなかで、いかに調整するか、非常に難しいというお話であったと思います。

それでは、次に内海先生、先ほど北陸新幹線の話がありましたが、そのあたりも含めて、広域ブロックへの期待・課題をよろしくお願いいたします。

○内海：私からは中部圏との関係性について、ポテンシャルの話を中心にさせていただきたいと思います。

先ほどもお話ししましたように、これからは北陸新幹線の沿線都市になります。中部圏と北陸圏は非常に関係が強く、国土形成計画では「日本のロータリー」という位置付けがされていたと思います。上越もロータリーの一角にあるわけですので、ぜひ一帯で考えていただきたいというところです。



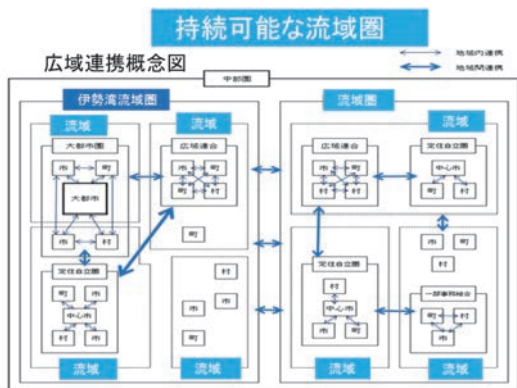
＜主要都市との時間距離＞

それから、名古屋の経済圏になると思いますが、名古屋大都市圏という黄色の部分です。それを取り囲むように木曾三川流域圏という緑色のところがあります。ここは中山間地であったり、農村や漁村と言ったほうがいいのかもしれませんが、いい言葉がないので、今は「非都市域」という言い方をしております。

それから、伊勢湾流域圏と考えておりますのは、三遠南信、飯田市や浜松市も含んだエリア全体です。このなかには、矢作川流域というユニークな取り組みをやっている流域もあります。

この圏域について、緑色の部分は水や資源という観点での取り組みがありますが、本来、圏域全体で比較的重要な役割を持つ名古屋市は、こちらにもっと目を向ける必要があると思っております。

上越のお話がありました、私は水道と下水道をやっており、新潟県は中部という扱いで連携をしておりました。この図は、中部圏全体の概念図を少しブレイクダウンしたものです。伊勢湾流域圏と、日本海側、それぞれのまとまりがあって、そのなかに大都市圏域であったり、広域連合を持った木曾の上流であったり、美濃加茂、飯田の定住自立圏というように地域全体、流域のなかに地域があるという捉え方をしております。



<持続可能な流域圏 1 >

先ほど戸田先生からもご紹介のあった内容とほぼ同じだとは思いますが、持続可能な流域圏づくりに必要な四つの要素があると思います。

一つは流域全体で共有できる理念が必要です。二つ目は、その理念をかたちにしたビジョンが必要です。流域圏でいえば、流域圏全体の将来像を描くことが大事です。それから三つ目に、これを果たしていくための体系化された総合的な計画が必要です。四つ目は、非常にこれが大事だと思っております、理念やビジョンを

つくったり、計画をつくり実施していくための仕組みづくりとしてガバナンス、場合によっては政府をつくってしまえということ、ガバメントという考え方もあろうかと思っております。

持続可能な流域圏

- 1 共有化できる理念
- 2 共有化できるビジョン
理念の具体化
流域圏の将来像
- 3 総合的な計画(体系化)
- 4 ガバナンス・ガバメント

<持続可能な流域圏 2 >

2010年に愛知・名古屋で生物多様性の会議を開いたときに、流域全体で森林と水をテーマにした連携する仕組みを、名古屋市が発案してつくりました。その名称は「流域自治体連携会議」といいます。会議に参加していただいている市町村は42自治体あります。



<流域自治体連携会議参加市町村 >

【宣言文】

流域自治体宣言
水の環・人の和・生物の輪

1. 私たちは、森・川・海の水でつながる命を大切に、その大きな恵みに感謝の心を持ち続けます。
1. 私たちは、豊かで清らかな水の環を守り、緑あふれる森林、澄んだ水辺空間を次世代に引き継いでいくために、流域全体の人の和をもって行動します。
1. 私たちは、水でつながる自治体間の連携・協働に努め、多様な生物の輪の生息環境を守ります。

<宣言文 >

首長さん方が集まり「流域自治体宣言」を宣言しました。ここには森と川と海というテーマで、三つのキーワードがあります。「水の環」「人の和」「生物の輪」です。これは水の循環、これは水争いがずっとおこなわれてきましたので平和の「和」、それから、生き物の場合は輪廻の「輪」ということで、三つの「わ」をキーワードにした理念をつくりました。

先ほど申しました四つの要素から考えますと、先ほどの「流域自治体宣言」は理念です。しっかりとしたビジョンや体系的な計画もできていないのですが、ガバナンスとしては、流域自治体連携会議で首長が集まることが、ガバナンスの素材になるかと思っています。



＜政策連合の取り組み＞

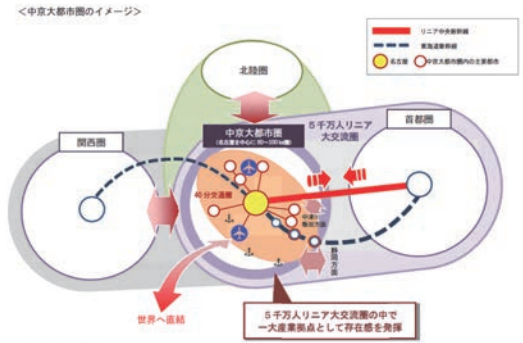
これは九州も調べさせていただき、流域全体で広域連合をつくらしたらどうかというアイデアもありますが、あまりにも自治体の数が多いので、九州の知事会でやっております、それぞれの県の存在はそのままにして、広域的な課題を政策連合というかたちで取り組んでおります。「こういう政策はどうだ？」と言ったら、賛成するところが手を挙げて、議会を通して予算を取って実施していく仕組みです。これであれば木曾川の流域でも、広域的な政策として実施することが可能なのではないかと考えております。以上です。

○岩崎：またあとで補足いただければと思います。それでは最後に、戸田先生をお願いしたいのですが、この地域を考えると、リニアが今後の広域ブロックを考える上で重要なテーマになるかと思うので、それも含めて、お話をいただければと思います。

○戸田：これまで越境地域について、三遠南信地域や皆さんの地域のお話がありました。越境しても、そのエリアで生きていこうというビジョンや理念というお話があったのですが、生きていく地域単位という感じが

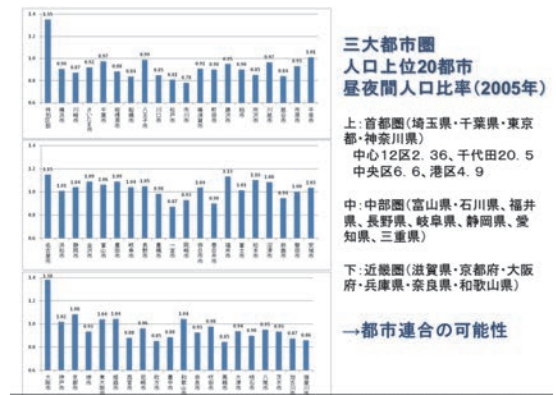
非常に強くあります。

ところが越境地域を取り巻く周辺の環境が変わると、越境地域の考え方も変わってきます。地域内も変わりますし、地域外との関係も変わってきます。中部の場合は、岩崎先生からお話あったリニアでの変化がずいぶん大きいということです。



＜中京大都市圏のイメージ＞

愛知県の「あいちビジョン2020」では、「スーパーメガリージョン」と言う大都市圏が拡張され、名古屋から東京は40分になります。そうしますと、名古屋圏域を考えるとときに「40分」という数字が非常に強く意識されています。40分圏は、だいたい東海環状の中になると思います。三遠南信はその外になっていきます。今までは何となく中部圏の三遠南信でしたが、三遠南信地域がどうなのかを明確にしていける必要があります。結論から言いますと、三遠南信を含めて都市連合体が中部圏のなかに、より多く出てくる必要があるのではないかと考えております。



＜三大都市圏人口上位20都市昼夜間人口比率＞

その論拠の一つが昼夜間人口比です。東京の場合、名古屋の場合、大阪の場合の比較ですが、東京の場合、中心都市である東京 23 区が、1 よりはるかに高く周りから人を圧倒的に集めています。その他の周辺都市は、1 よりずっと低くなるというのが、首都圏と大阪圏の構造です。

ところが名古屋圏は必ずしもそういう構造ではありません。つまり、ものづくりは人口を要しなくても、非常に強い力を持つので、そうした都市が分散している傾向にあります。ですから、都市連合がいくつかできてくる可能性があるのではないかと思います。



＜中部圏から中部(圏)都市連合へ＞

そういう風に考えると、中部圏をおおざっぱに分けることができます。各都市連合体というのは、誰かが決めるのではなく、自分で決めることですから具体的な表記はできません。一つ一つの都市連合体が自立的に決められるものです。おそらく、名古屋圏はこのようなかたちで、広域性を高めるのではないかと思います。

三遠南信もいくつかの変化が出ると思います。一つは、浜松市・豊橋市は東海道上にありますから、広域的都市としての役割です。それから、飯田もリニアの線上に乗っています。その意味で新しい都市的展開があると思います。

その中でやはり中山間、県境中山間が一番重要です。ここに対しての思いが達成されないのであれば、このような越境地域はあまり意味がありません。支え合うということは、強いところだけ強くしたらいいではありません。寧ろ、中山間地が三遠南信地域を結び付けているポイントだと思います。特徴的には水源地でもありますし、人口減少地域でもあります。

細かくて恐縮ですが、住民は中山間地域をどう思っているのか、この意思是非常に重要です。東三河と遠

州の都市部の住民に 1 万人ずつに「山の機能をどう考えるのですか?」ということ聞きました。選択肢は、「必要不可欠であり、優先的にやるべきだ」、「中山間は大事だけれども都市のほうが大事だ、優先だ」です。2 番目の様な気がしますが、調査結果は 1 番目で、「中山間の疲弊は仕方がない」は極めて少数です。これが歴史的なつながりへの思いの部分だと思えます。

三遠南信中山間部の窮状に対する都市住民の意識

選択肢	東三河地域 下流部住民の回答率	遠州地域 下流部住民の回答率
都市部からみて中山間部の持つ機能は 必要不可欠であり、優先的に対策を実施すべきである	63%	62%
都市部からみて中山間部の持つ機能は 大切であるが、対策を実施する優先性は低い	16%	17%
中山間部の疲弊は 仕方がない ことであり、対策が必要とは思わない	2%	2%

＜三遠南信中山間部の窮状に対する都市住民の意識＞

このような意識がはっきりしてきて、絵の様に都市部と中山間が結びつくということかと思えます。広域ブロックのなかで、三遠南信が都市圏を形成し、その内部構造のあり方も、リニアがより明確にするように思えます。

○岩崎：どうもありがとうございました。かなり話が多岐にわたりましたが、コメントーターの福島先生からコメントをいただきたいと思えます。

○福島：山田先生は、持続可能な広域圏をつくるためには、共有の理念・ビジョン・体系計画・ガバナンスが必要であること指摘されましたが、これは非常に重要な視座だと思えます。一方、飯干先生が指摘されたのは、市町村の認識を合わせるのも大変だし、県境を越えてやろうとすると、県が抵抗勢力になってしまうという現実です。越境ガバナンスの確立は容易でないことが再認識できました。

また、内海先生のお話のなかで思ったのは、上越市はいろいろなブロックに跨る位置にあり、他のブロックを相互につなぐ越境関係を構築できるポテンシャルを有していることです。こうした戦略的な地理的条件を生かして、ブロック間の連携を考えることも国土計画画面上大切でしょう。

戸田先生のお話は、道州制などで議論されたときに
出てきたブロック化とは違ったタイプのブロック化が
模索されるべきではないかということです。ガバナンス
の在り方としては都市の連合体というかたちで、地
に足がついたかたちで、県境や市町村境を取り払い、
どうすれば持続可能な地域を形成させるのかを考
えることが大切であるという指摘です。

○岩崎：どうもありがとうございました。それでは、
第3巡目に入りたいと思います。最後は、広域ブロッ
ク政策への提言をそれぞれのパネリストの方から、ご
指摘・ご提言いただければと思います。これまた飯干
先生からよろしく願えますでしょうか。

○飯干：広域ブロック政策ということで、先ほどから話
があったように、例えば、九州という地域は、まさに島
ですので道州制などを議論する場合、非常にやりやすい
のだろうと思います。経済界も知事会も市長会も、道州
制に異を唱えているわけではなくて、積極的に議論しま
しょうというスタンスになっています。地域政策、広域
ブロックでの政策展開はやりやすいと思っています。

ただ、現実問題としてどうかという、いざやろう
とすると一気に進むとは思っていません。とりわけ宮
崎の雰囲気はそうではないと感じています。だからと
いって今のままでいいというわけではありません。

広域でできる政策、とりわけ機能を跨がなければい
けない政策、九州の首長が課題を共有できる政策は有
害鳥獣対策です。これはどこの自治体も毎回のように
議会で質問が出ています。私が町長になってから辞め
るまでの間に予算は数倍の予算規模になっています。
では、それに比例して有害鳥獣が減っているのかとい
うと、逆に増す勢いです。例えば、南九州で3県が
一緒になって一斉に有害駆除、いわゆる狩猟を実施す
るという政策をやっています。ただ、それはあくまでも
同じ日に山へ入って捕っています、というだけの話
です。いろいろな自治体がイノシシやシカを捕ると、
1頭に対して、いくらというお金を出し、それで減っ
てきていることは事実ですが、やっていることが県境
を越えるとバラバラです。獣に県境はありませんので、
こちらで追い出したのが、向こうに行っているのでは
ないか、向こうのがこちらに来ているのではないかと
いう議論があるぐらいです。これをもっと体系的に自
治体として取り組む。これに対しての異論や違和感は、
自治体・市町村長には、まったくない課題です。これ

を一つやってみたらどうかと思っています。

先日、こちらに来る前に職員に「今、君らの頭に浮
かんですぐできることは何か？」と聞いたところ、こ
のことが最初に出てきました。次に出てきたのがバス
の問題で、もう少しリンクしてバスを走らせることが
できるのではないかということです。医療などは、い
ろいろデリケートな問題があって、すぐに解決するの
は難しいとは思いますが、課題を絞っておこう。

その際に問題になるのは、どこがエンジンとなって
進めるのかになってきます。とりわけ小さい中山間地
域に、そのような課題が多いわけですから、そこには
圧倒的にロジックが欠けている部分があります。この
ようなセンター的なものが、われわれの地域にあると
いった、そこが一つのポイントだと思います。

私は辞める2年前に、課題解決のために、この地
域にシンクタンクをつくってほしいと、知事に直接提
言しました。知事は「即やります」ということで、市
町村長から言われた課題を、初めて県が予算化したと
新聞でも取り上げられました。では、どうなったのか
と言いますと、結果的にはパッとせずにその構想と取
り組みは終わってしまいました。やはり問題は、われ
われ現場側が組み立てをしなかったために失敗したと
思います。課題をしっかりと捉えて政策立案して、連携
を取りながら展開していくことが大切ではないかと思
います。やはり、首長だけに委ねていると、忙しいし
集まることは難しいですから、そういったところがあ
ればいいのかと思います。

今、個人的に話しているのは、この地域で一度そう
いう取り組みを熊本県と一緒にやってみましょうとい
うことです。そのコーディネートは、辞めている私は
暇ですから、どんなことでもやりますよということ
です。隣の自治体の首長、県の人たちなどとやること
によって、もう少し九州が一つとなってできることが
出てくると思っています。

経済フォーラムも、来週、戸田先生が嬉野で議論展
開をして、具体的に課題をしぼってやっていくこと
になっているようです。それに各自治体を巻き込んで具
体的にやることができれば、九州が一つになってでき
ることに、もっと近づくのだろうと思います。

ただ、山田さんが言ったように、知事会も政策で結
び付きましょうということをやっています。五ヶ瀬町も
熊本県の予算で町の観光政策もやらせていただしてい
ます。そういうことは実際にできていますので、もう少
し広げていく必要があると思っています。以上です。

○岩崎：課題を焦点化した政策連合のさらなる強化ですね。それでは、続いて内海先生いかがでしょうか。

○内海：非常に大きな中部圏のなかで上越は20万人規模ですから、非常に小さくて埋没してしまいそうな場所です。どのようにして存在価値を出していったらいいのかが、非常に大きな課題であり、そのためにも周辺と連携をしなければならないと個人的には思っています。例えば新幹線ができますと、県境を挟んだ飯山市との40Kmがわずか10分で結ばれることになり、これまで山脈があって交流が少ない地域でした。上越市や飯山市などが、東京都や大阪府などからお客さんをどう取ってくるかを考えるのも大事ですが、ここがライバルではなく仲間ということで、連携ができないか考えたいと思っています。

また、先ほどもお話をしましたが、湯沢町を通る上越新幹線と、北陸新幹線がライバルだというような狭い考え方ではなく、このエリア帯が両方の新幹線を使いながら発展していくという考えを持たないと、狭いところで取りあいの話になってしまうので、こちらの湯沢町との連携も考えていきたいと思っています。

雪国の中山間地域というくくりで考えれば、課題は共通しています。先ほどの鳥獣害対策の話もありましたが、雪国もイノシシやクマが増えてきて大変なことになっています。そういったことを一緒に考えていく仕組みを意識的につくっていききたいと思っています。

そのうえで、この国土形成計画のなかに、県境地域の連携による都市連合のようなものを位置付ける制度があれば、われわれも土俵に乗っていきやすいかと思えます。要望というよりも、まずはわれわれが頑張らなければならないということで終わらせていただきたいと思えます。以上です。

○岩崎：ありがとうございました。それでは、山田先生、先ほどの補足も含めてお願いいたします。

○山田：私は先ほどから木曾三川の木曾川を中心にお話ししてきました。冒頭申し上げました伊勢湾流域圏全体という考えについて二点あります。一点目は、例えば三遠南信の取り組みと、「木曾三川流域圏」という名古屋市を中心にした地域と、どのように連携、連帯していくかが一つです。

もう一つは、先ほどの基調講演でもありましたが、最初の概念図の緑色の部分をどのように考えるか

です。政策論争は比較的都市論が多いですが、私が言う「非都市地域」、中山間地や農山村の地域づくりの議論を活性化していく必要があると思います。

持続可能な流域圏図の左側は「伊勢湾流域圏」ですが、右側は新潟県も入れた日本海側の流域圏です。真ん中に矢印で結んでいますが、大きな意味では、実際にこの連携をどのようにしていくのか、例えば、先ほどの三遠南信と名古屋市の取り組みの連帯と同じように、大きな圏域のつながりをどのように確保しているかも問題だと思っています。

三つ目には、具体的に政策を展開する必要があると思っています。水や環境という視点で今まで取り組んできました。実際には、上流での起業支援をどうしていくのか。例えば、上流で起業しようとする人たちが、下流側の都市から起業を欲する人たちへの支援策を打っていく。あるいは、どの市も起業支援をする人たちには資金提供をする政策。逆に上流が水源地でつくったものを、下流側で地産地消で買っていく。普通、地産地消というと、その都市か県のなかで「地産地消」という言い方をしていますが、私としては流域圏で地産地消と考えたとき、上流でつくった製品を下流側が買えるようにします。

役所が買う場合でも、一般競争入札で、「誰が」という話になってしまって、先ほどの東京都の大きなところが安い価格で札を入れれば、そこが取ってしまうわけです。ですから、上流でつくった地産地消のものを流域圏のなかで賛同を得た自治体が指定製品のような格好で指定してしまえば、一般競争入札などのレベルの調達とは違うものになります。そんな政策について政策連合のようなかたちで実施できれば、実効性のある一つずつの施策が展開できると思っています。以上です。

○岩崎：ありがとうございました。それでは、最後に戸田先生からよろしく願いいたします。

○戸田：「広域ブロック政策への提言」ですが、三遠南信の都市部のエリアです。今度、新東名高速道路が開通して、現東名高速道路と繋がります。23号バイパスも自動車専用道路レベルのものができました。これは三遠南信の運動のたまものだと思います。通常、境界地域は基盤整備が進みませんが、三遠南信地域は逆に県境の自動車道が進み、県内ができていない。これは運動のたまものだと思います。

道路は実際にできてきましたが、ここに制度の壁が

あります。都市計画制度は県境できれいに切れています。この地域を合わせると150万人ぐらいです。今後は、都市計画制度をどのように考えるかだと思います。そうしますと東海道のなかに、一つの都市核を考えることができます。これは広域制度のなかで考える必要があるだろうと思います。ここだけではなくて、全国にそういうものが多いと思います。



＜県境を越える豊橋・浜松環状道路＞

県境を越える連携事業については、飯干先生と何回も話をしています、非常に同感するところが多いです。研究で全国の県境地域に行きますと、多くは非常に珍しい県境を越える取り組みをしていると言っているわけです。しかし、全国的にみれば、どこにでもあり当たり前に行けるということです。この理解が必要です。



＜県境を越える連携事業＞

県庁に関する活動、制度の適応を受けているものは、国に自動的に集まるように収集システムができています。しかし、末端からの情報を集める仕組みはありま

せん。これは当たり前です。しかし、集めてみるとこのような総量を持っています。

調査結果をみると、先ほどおっしゃった鳥獣害も多いです。それから、交通網、これは道路ではなくてシステムです。ですから、先ほどおっしゃったバスが運動できるような仕組みの問題、このようなことはできることとして、やっていくことです。

最後に、三つのことをまとめています。これは先ほどのものと言いますと、上から「水平補完」、「垂直補完」、「新制度」のようなことです。広域ブロックとの関係で、先ほどから飯干さんがおっしゃった首長の意思決断の問題、それから山田さんもおっしゃった政策連合、そういうものがどのようなかたちでできるのか。これらは越境という、従来の政策や制度を越えますから、アプローチが重要なのだろうと思います。都市レベルと県レベルの両方が、何かのかたちで考えていくことだと思います。

次に越境地域内です。今、広域連合を三遠南信は指向しています。また、越境地域にシンクタンクが必要だろうと思います。行政だけでは大変です。なぜならば、ほとんどの制度は上下に流れるようにできているわけで、それを下から飛び越えるには大変な努力が必要です。そこで意思決定に関する情報機能を、行政から少し離れたところに置かなければならないと思います。そこには民も入りますし、そうした仕組みが必要だろうと思います。

越境地域から広域ブロック政策へ

- 広域ブロック
 - ・中部圏都市連合
 - ・中部圏知事連合(会議)
- 越境地域内
 - ・越境地域運営組織の確立(H28年広域連合等)
 - ・越境地域シンクタンク
 - ・越境事業
 - ・中山間地維持施策
 - ・産業・エネルギー
 - ・小地区・住民活動・人財の地域戦略
- 越境地域相互の共同(政策提言活動)

＜越境地域から広域ブロック政策へ＞

最後は、「越境地域相互の共同(政策提言活動)」ですが、そこで私が一番気になるのは、県境の小さな町村です。飯干さんもおっしゃいました、人口減少がずいぶん言われ、消滅すると言われていますが、それに対して対策の回答はないわけです。国全体の支え方が

政策としてないのは、極めて不自然なのだと思います。九州でも知事会と市長会はだいたい考えが似ていますが、町村会は違います。それは状況が違うともいえますが、寧ろ全国町村会が越境政策について政策を共有し、提言することが有用ではないかと思います。以上です。

○岩崎：それでは最後に、また福島先生よりコメントをいただければと思います。

○福島：皆さまの最後のご発言であったと思いますので、少し全体を総括するような、これまでの皆さま方のご意見を聞いて、私なりに理解したこと、また私自身が課題に思っている点について少しお話をしたいと思います。

今日のお話を聞いていて思ったことは、日本では越境地域の連携や広域的な連携に必要な広域ガバナンス・システムがまだ出来上がっていないということです。その意味で、課題を共有する県・市町村が行政境を越えて具体的なプロジェクトを実際に動かしていくことが求められているということです。

山田先生や戸田先生が指摘されたように、共有できる理念をどこにセットするのが鍵となるでしょう。相互依存関係や相互にメリットのある広域課題を掘り起こすことが大切です。例えば、資源・自然を管理する流域圏、経済面では競合関係になりがちなものよりネットワークで競争力を高めていく観光、文化・風土や歴史的なつながりを生かした地域活性化、域内経済やエネルギーの循環などは、可能性のある広域課題です。

そこから実際のアクションを、連携のメリットを実感しながら、互いに信頼関係をつくっていく。ソーシャルキャピタルでも、市民活動を通じて、ネットワークや信頼といったものが蓄積されていきます。また参加することによって、ヒューマンキャピタルのような、マネジメントする能力も高まってきます。同じことが広域連携、あるいは県境を越えた連携においても非常に重要になると思いました。

近年、国土形成計画の在り方が大幅に変わりましたが、実はあまり機能していません。その原因は、国・県・市町村という行政階層間を調整すると同時に、総合計画ということで縦割りも越えるという、かなり高度な課題をクリアする必要があるためです。しかも、それを非常に短い間でやろうとするから、国土交通省の国土形成計画を担当する部署が、いろいろな意見を十分な調整もないままに取りまとめで、総花的にパッケー

ジ化して計画案を策定することになりがちです。それは予算取りのための手段でしかありません。こうした状況を克服していかなければなりません。

それはパネリストの皆さんが報告されたような具体的な取り組みから生まれてきます。そこに必要なガバナンスも生まれてきます。本日はこれらを積み上げていくことの大切さを学ぶことができました。

○岩崎：皆さまどうもありがとうございました。福島先生から総括的なコメントを出していただきましたので、私からは一点だけ気になったこととお話しさせていただきたいと思います。

「広域ブロック」と言った場合、その中身がどうしても気になります。このシンポジウムのなかでも、再三お話が出てきましたが、広域ブロックのなかの特に周辺地域、山田先生は「非都市地域」とおっしゃっていましたが、具体的には農山村をどうするのか、この点が常に課題になろうかと思っています。

いわゆる選択と集中の論理では、広域ブロックのみならず地域圏の持続性は担保できないわけです。ですから、その利益をいかに再分配するのか、再分配するだけではなく、地域経済の循環圏をどのようにつくっていくのか。場合によっては、地域自給圏というようなことも念頭に置きながら議論をする必要があるのではないかと感じました。

おそらく、そのための理念・共有ビジョンを持つこと、これも再三話に出てきました。また、そのための具体的な仕組みづくり、制度の議論。それから、今日は話題にはのぼりませんでした。非常に進歩の著しいICTをはじめとする科学技術をいかに活用するのか。そのようなことも含めて、おそらく今後は越境地域政策の研究課題になっていくのではないかということ、あらためて感じたいです。

このシンポジウムは、あくまでも総論的な議論でございます。より細部に関わる議論は、午後からの五つの分科会でおこなわれる予定です。この会場に来ていただいている皆さま方にも、ぜひ午後の分科会にも参加いただいて議論に加わっていただければ幸いです。

それでは最後に、パネリスト、コメンテーターの先生方に大きな拍手をもって、このシンポジウムを終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

(終了)